

”Domain” クラスの数式解説 (“domain_I.h”)

Open DEM Japan

2025年7月2日

本ヘッダは、計算領域 (Domain クラス) が直方体ボックス Ω とそのサブボックス ω に対して行う種々の幾何判定をインライン実装している。ここでは変数名の説明を省き、判定ロジックを純粋な数式として記述する。二次元 (dimension = 2) やくさび領域 (wedge) の特殊処理はコードと同様に割愛し、三次元直方体の場合を標準とする。

1. ドメイン内判定

全体ボックス

$$\Omega = [x_{\min}, x_{\max}] \times [y_{\min}, y_{\max}] \times [z_{\min}, z_{\max}]$$

に対し、座標 $\mathbf{r} = (x, y, z)$ が

$$\chi_{\Omega}(\mathbf{r}) = \begin{cases} 1 & x_{\min} \leq x \leq x_{\max} \wedge y_{\min} \leq y \leq y_{\max} \wedge z_{\min} \leq z \leq z_{\max}, \\ 0 & \text{otherwise} \end{cases} \quad (1)$$

となるかを返すのが `is_in_domain` である。コードは (??) の論理積を高速に評価するだけである。

2. サブドメイン内判定

並列計算の各プロセスは

$$\omega = [x_{\text{lo}}, x_{\text{hi}}] \times [y_{\text{lo}}, y_{\text{hi}}] \times [z_{\text{lo}}, z_{\text{hi}}]$$

を所有する。ただしボックス境界と一致する面では丸め誤差を避けるため $\varepsilon = \text{SMALL_DMBRDR}$ を加減し

$$\begin{aligned} x'_{\text{lo}} &= x_{\text{lo}} - \varepsilon & \text{if } x_{\text{lo}} = x_{\min}, \\ x'_{\text{hi}} &= x_{\text{hi}} + \varepsilon & \text{if } x_{\text{hi}} = x_{\max}, \end{aligned} \quad (2)$$

(y, z 方向も同様) と置く。よって `is_in_subdomain` は

$$\chi_{\omega}(\mathbf{r}) = \begin{cases} 1 & x'_{\text{lo}} \leq x < x'_{\text{hi}} \wedge y'_{\text{lo}} \leq y < y'_{\text{hi}} \wedge z'_{\text{lo}} \leq z < z'_{\text{hi}}, \\ 0 & \text{otherwise} \end{cases} \quad (3)$$

を返す。开区間を採用することで隣接プロセスとの重複を排除している。

3. 拡張サブドメイン判定

粒子挿入時には「拡張サブドメイン」 $\tilde{\omega}$ への包含が必要である。通信位相格子を $\mathbf{p} = (p_x, p_y, p_z)$ 、自身の格子座標を $\mathbf{m} = (m_x, m_y, m_z)$ とし、各成分について

$$\tilde{C}_i(\mathbf{r}) = \begin{cases} x_i \geq x_{\text{lo},i} & m_i = p_i - 1, \\ x_i \leq x_{\text{hi},i} & m_i = 0, \\ x_{\text{lo},i} \leq x_i < x_{\text{hi},i} & \text{otherwise} \end{cases} \quad (4)$$

($i = x, y, z$) を満たすとき

$$\chi_{\tilde{\omega}}(\mathbf{r}) = \prod_{i=x,y,z} \tilde{C}_i(\mathbf{r}) \quad (5)$$

と定義し、`is_in_extended_subdomain` は $\chi_{\tilde{\omega}}(\mathbf{r})$ を返す。

4. サブボックス境界距離チェック

許容距離ベクトル $\mathbf{d} = (d_x, d_y, d_z)$ に対して

$$\delta_i^{\text{lo}} = |x_i - x_{\text{lo},i}|, \quad \delta_i^{\text{hi}} = |x_i - x_{\text{hi},i}|, \quad i = x, y, z, \quad (6)$$

すべて $\delta_i^{\text{lo}} \geq d_i \wedge \delta_i^{\text{hi}} \geq d_i$ であれば真 (`true`) を返すのが `check_dist_subbox_borders` である。これは粒子が境界から安全距離 \mathbf{d} 以上離れていることを確認する判定である。

5. 最小サブボックス幅

$$\Delta = (\Delta_x, \Delta_y, \Delta_z) = (x_{\text{hi}} - x_{\text{lo}}, y_{\text{hi}} - y_{\text{lo}}, z_{\text{hi}} - z_{\text{lo}}), \quad (7)$$

$$\min_i(\Delta_i) = \min\{\Delta_x, \Delta_y, \Delta_z\} \quad (8)$$

を求め、その値と対応する次元インデックス i を返すのが `min_subbox_extent` である。

6. 周期境界ゴースト判定

隣接探索カットオフを $r_c = \text{cutneighmax}$ とするとき、粒子位置 \mathbf{x} が

$$\left(x_i < x_{\text{min}} + r_c \vee x_i > x_{\text{max}} - r_c \right) \wedge (\text{軸 } i \text{ が周期的}) \quad (9)$$

のいずれかを満たし、かつローカル粒子でないとき `is_periodic_ghost` は 1 を返す。式 (??) は周期境界近傍に存在しうるゴースト粒子の幾何条件である。

7. 所有・代表粒子判定

粒子タグによる全域一意マップ `map : tag \mapsto index` を仮定する。粒子 i が

$$i = \text{map}(\text{tag}(i)) \quad (10)$$

を満たせば `is_owned_or_first_ghost` は `true` を返す。すなわち (??) は「所有粒子または最初のゴースト表現」であることを意味する。

8. まとめ

本ヘッダに実装された各インライン関数は、集合指示関数 χ の形で書き下せる簡潔な論理判定 (??)-(??) を高速に評価している。これらは離散要素法シミュレーションにおける粒子分配・同期の根幹であり、数式として眺めれば「領域分割アルゴリズムの特性関数」と解釈できる。